

## 巻頭言 RI 人材募集中

篠原 厚

Shinohara Atsushi

(大阪大学大学院 理学研究科 化学専攻,  
大阪大学放射線科学基盤機構・機構長)



この歴史あるニュースの巻頭言をお引き受けした際に、直ぐに頭に浮かびましたのは、筆者の恩師である音在清輝先生が本誌の当に巻頭言に書かれた文章です。「若い研究者へ」というタイトルで、研究の独創性の重要性を説き、その進め方を独特の比喻で説いたものです（1981年6月号）。「銅鉄主義」で名取りになるのではなく、「小銅主義」で小さくても良いので家元になってほしいという内容でした。筆者の座右の銘でもあります。当時、多くの若手研究者の心にも届いたのではないかと思います。しかし、今、私たちの放射線・RI関連の分野は、このメッセージを受け取って貰いたい「若い研究者」の減少、人材不足が大きな課題となっています。

この分野は、放射能の発見後、急速に発展し、早期に社会との（特にネガティブな）関わりを持ってしまいました。科学・学問が人類にとって大きな変革をもたらすものであればあるほど、その発展の過程で社会との間に衝突が起こる（課題が生じる）のが常です。社会に変革をもたらすという意味では、今のAI技術がちょうど同様の状況にあるように思えます。原子力や放射能の世界も、新しいレベルの力、サブアトムの世界を受け入れるかどうかで、未来の人類の行動範囲に大きな影響を与えます。

研究面を見ると、これまでRIの主要なユーザーであった生物科学関連が激減した一方で、新しい量子ビーム利用、新元素の発見、医学・薬学分野での新規診断や治療等、夢のある基礎科学や応用研究が増えています。しかしながら、原子力のゴミ問題、福島事故における環境回復、廃炉、放射線障害・被曝の問題、またこれらを受けた放射線規制の在り方等も含め、避けて通れない大きな課題があります。このような人類的な課題解決は、将来の科学・技術の進歩に期待しているところが大きく、しっかりとした人材育成が必要条件となります。たとえば、（政治面は抜きにして）もっと強い逆風社会になれば、大学の関連分野に優秀な学生が来るでしょうか？人材の供給が減り、新世代どころか今の技術すら途絶えます。廃炉はできず、50基（世界では450基）以上ある原発は残り、その廃棄物問題もさらに先送り、長期的には基礎研究や社会に貢献していた関連技術もベースから崩れ、せっかく開かれたサブアトムの世界を享受する人類の未来の姿が変わるかもしれません。私たちがもっと長期的継続的な科学・技術のビジョンを持つべきですが、その大前提は教育でしょう。人類的課題に熱意を持って挑戦する若い人がどんどん出て来るような教育環境と社会環境が必要とされています。

人材の話題に戻りますが、ポイントは、やはり最初に人材（学生）に接する大学だと思います。ただ、今、大学も大学人も弱っています。大学における教育・人材育成の充実には研究の活性化が必須ですが、この分野の研究の重要な場のひとつである非密封RIの取扱施設の維持が厳しい状況にあり、減少しつつあります。これを受け、日本学術会議の提言もあり、全国の子密封RI施設の連携拠点化の構想が検討されています。私たちの分野は、開き直るならば、解決すべき人類的課題が山積み、すなわち人類の未来にとって重要な分野です。そして、夢のある研究や社会に貢献する応用が盛りだくさんの、今が旬の分野です。弱っている皆さん、連携し励まし合って、課題解決と併せて、最初の銅を見つける楽しい研究を進めましょう。そうすればきっと銅を見つけない若い人が集まります。